
ぽたぶっ！ ～徒然銀輪話

行末闇多

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぽたぶっ！ ～徒然銀輪話

【Nコード】

N4877U

【作者名】

行末闇多

【あらすじ】

とある地方の高校の、ゆるゆるとした自転車部のお話です。自転車部といっても、シリアスにロードレースの大会に出たりとかそういう事はありません。

ゆるーっと自転車に乗ったり自転車のマニアックな話をしたりとかそういう話、でいいと思います。

プロローグらしきもの

自転車を駆り、はじめて1日の走行距離が100kmを超えたとき、自分の中で何かが変わったような気がした。

……もちろん、それはある意味幻想でしかなく、自分の過去と未来はスイッチのように切り替わるわけもなく、何かが変わるとすればじわりじわりと少しずつ変わっていくものだ、というのは分かっているのだが、ただ、何かの閾値というか、「ああ、変わったな」という実感は、やはり区切りにおいてそう理解される、そういう気がする。

少年は、そう考えながら、ペダルを踏み込んだ。正直理屈っぽいのは、少年のいい所でもあるが、悪い所と取られる事の方が多いだろう。少年は運動が苦手である。正直なところ、小学校のころから運動といえば後ろから数えた方が早い、という成績であった。唯一、歩くことだけは嫌いではなかった。

「っ、ふう！……っ！」

坂道のでっぺんにたどり着く。速度というベクトルを坂道の途中で失い、後は軽いギアをできるだけくるくる回すようにして登りきった坂だが、それでもキツかったようだ。そこで一度サドルの前に下りて、はぁ、と荒い息を整えるように吐くと、深呼吸をする。来た路を振り返ると、そこをぐんぐんと登ってくる別の自転車があった。……ロードだな……女性？

どうやら、軽量のロードバイクを駆る女性のようなだ。その女性は流線型のヘルメットを被り、ぴったりとしたサイクルジャージに身を包んで、かなり本気度の高い装備で固めている。と、坂を上り終えたかと思うと、ビンディング……足とペダルを固定する金具……を外して、その女性もサドルの前に下りた。そして、自分の方を見る

と、話しかけてきた。

「こんにちは、斉藤君。君も自転車に乗ってたんだ？」

一瞬、誰だか分からない。変な顔をしていたのだろう、くすり、と笑って、ヘルメットと、サングラスを外した。

「……ああっ！？坂本さん！？」

同じクラスの、坂本さんだった。

「……………なんてこと、ないもんかね？」

「無いです」

妄想に浸る斉藤センパイに、僕はにべも無く答えながら、ローラーを回していた。6月。この時期は自転車乗りにとっては鬼門である。いや、本当に行くところまで行き着いた連中なら雨もご褒美かもしれないが、残念ながら僕らのようなぬるい連中は、雨の日にわざわざ自転車に乗ったりなんかしない。危ないし。

ここは五方原高校自転車部。自転車部といっても、ロードレースやトラック競技に出場したりとかはしない。ポタリング……まあ、つまりは「自転車による散歩」といったところだ……を中心とした、実にぬるい集まりなのである。文化系体育部というべきか、体育会系文化部というべきか。だから、部員の間では通称「ポタ部」と呼ばれている。

「ってかセンパイ、その『坂本さん』って実在するんですか」

「さすがに本当のクラスメイトを妄想の中に出すのは憚られるなあ」

自分自身は良いらしい。まあ人に迷惑をかけないだけ、良識はあるのか。部室……老朽化した体育館に併設されていた、廃棄される予定だったプレハブの用具入れを、体育館が立替えになるときに数年前のOBがぶんどってきて今の位置に移設した、割と広いのはいい

が夏は炎熱、冬は極寒という環境で、当然ながら今の時期は蒸し暑くてしょうがない……の中でやってる分には許してあげよう。

「……あのさあ、和地山。そろそろローラーやめない？ 蒸し暑いところの上ないんだけど。外でやれよ、それ」

「外は土砂降り、風も荒れ狂ってて高々屋根があるあたりじゃびしょぬれです。校舎の中でやるにしても、そこまで運ぶ間に濡れちゃいますよ。それに……」

ローラーを漕ぐ足を止めて、ボトルを手に取り、飲む。固定ローラーだから、足を止めたくらいなら倒れない。飲みながら、じっとセンプイの顔を見つめて言った。……変な妄想を垂れ流してくるんだ。少しくらい仕返ししたっていいだろう。

「……息を荒くした女の子と二人きりで、部室に籠ってるなんて、ご褒美じゃないですか？」

満面の笑顔でにっこりと微笑むと、斉藤センプイが複雑な顔をする。なんだ。僕こと、和地山^{わじやまのぞみ}望……一年生……は、複雑な顔をした先輩に、飲んでいたボトルを投げつけた。

(2)

さすがにちょっと可哀想だから、ローラーを漕ぐのをやめた。椅子……これも何処からか拾ってきた、古ぼけたパイプ椅子だ……に座り、タオルで汗を拭く。

「で、さっきの妄想話は何ですか。なんか小説でも書こうって話ですか」

「そうそう。今度例の小説サイトに投稿しようかと思って。意外と自転車関係の話って少なくてさ、ねらい目かなーって」

「あそこのサイト基本『転生』『チート』『ネトゲ』ばっかですからね。それにしてもその話、膨らむんですか？」

「さあ、どうなんだろう」

「……まあ、頑張ってください。……ところで、センパイは帰らないんですか？ どうせ今日はポタなんて日じゃないでしょう」

僕のアニキがここのOBで、実は中学生のころから割と入り浸ってたので、部室には既に私物が山積みだったりする。新入生の部員は三人居るが、一人はあまり部室には居付かない。特に雨の日はさっさと帰ってしまう。もう一人は雨だろうが雪だろうが、暇さえあれば部室に入り浸って、一年にしてまるで部室の主になりかけているが、彼も今日は用事があるらしく帰ってしまった。

僕がなんで残ってるかって？ そりゃ、毎日ペダルを回さないと落ち着かない性分だからだ。家にローラーが無いわけじゃないが、夜回したらうるさいって怒られる（タダでさえうるさい三本ローラーなんだ！）。だから、雨の日は逆に部室に来ざるを得ない。

「朝一瞬晴れてただろ？ だからチャリで来ちまったんだよ。だけど

なあ……」

と、恨めしそうに部室の自転車ハンガーにひっかけた自分の愛車を見る。

「……23cじゃ、雨の中怖くて帰れないだろ」

「置いてきやいいじゃないですか」

「……虎の子のロードだぞ。盗まれたらどうすんだ！」

「いや、一応部室鍵掛かるじゃないですか。外の駐輪場じゃないんですから」

部活の性質上、メンテをするためのスペースと、自転車を保管するためのスペースが必要だ。だからこのこのプレハブ倉庫なわけだ。普通の弱小体育会系の部室は6畳程度しかないが、この部屋は優に12畳はある。まあ、暑い寒いとはかく、この部室を分捕ってくれたOBに感謝……あれ、もしかしてそれってアニキに感謝しないといけないのか。なんか複雑だな。

「つてもなあ……」

まだ愚図る。まあ、気持ちは分からなくもない。冬休みから春休みにかけて、決して対人関係が得意とは言えない……自転車という趣味がなかったら、下手したら引きこもりになってもなったかもしれない、斉藤センパイが、必死でバイトをして買ったロードバイク。機種はGIANTの”TCR 2”だ。

TCR2は11万円程度。その価格は、ロードバイクとしてはまあ安いほうだとは思うが、何しろ高校生だ。絶対的な価格として、それが安いなんて、誰も言えないだろう。このロードには、標準でヴィットリアというメーカの”ZAFFIRO 700x23C”と

いうタイヤが付いている。700というのはタイヤ……というか、リムの大きさ。23というのがタイヤの太さだ。単位はミリ。ちなみに、標準的な軽快車、いわゆるママチャリは34〜36ミリ程度の太さのタイヤが付いている。

タイヤは一般的に細いほうが軽く、高速に向く。逆に太いと、少しくらい荒れた路面であっても走破でき、クッション性に富む事になる。つまり、センパイのロードについたタイヤは、悪路の事や雨の日の事なんか考えてないタイヤだってことだ。

「じゃあ、乗って帰ります？」

「……危ないし、汚れるし、ああ、俺なんで乗ってきちゃったんだろ」

「……晴れてて、久しぶりに青空だったから、嬉しくなっちゃって、天気予報も何も見ずに来ちゃったんでしょ。今日の天気予報、午後100%雨でしたよ。ってか、台風崩れの熱低が来てるってのに……しょうがないじゃないですか。まあ、明日は晴れるみたいですから、朝一で取りに来れば」

「ううー、どうしよう……」

悩むセンパイを尻目に、自分は帰り支度を始める。レーサーパンツの上からスカートを履き（一見すると、時々いるようなスパッツを履いた上にスカートを履いている女の子たちとあまり区別はつかない）、上はアンダーウェアを着けたままTシャツを着ているので、制服をその上から羽織る。ちょっと暑いが、家に着くまでの我慢だ。そして、携帯を取り出すと電話した。

「ああ、アニキ？ うん、ごめん、迎えに来てもらっていいかなあ。あとさ、悪いんだけど、斉藤センパイも送ってってくれない？ うん、なんかロードで来たんだってさ。うん、そう。朝晴れてたから」

漏れ聞こえる声に、センパイが顔を上げる。

「……うん、うん。輪行袋にいれとけ？了解、伝えとく。じゃあ、30分後だね。よろしくー」

電話を切って、センパイを見る。

「だってさ。アニキが送ってってくれるそうですよ、センパイ。よかったねー」

「おおおお、ありがとおおおおおおおおお」

センパイがいそいそと自分のTCR2のクイックレバーを倒し、車輪を外す。傷つきそうな部分を手際よくそこらにあるぼろ切れで保護すると、棚にあった輪行袋に詰め込んで行く。僕はローラ台を片付けると、ほとんどローラ台専用になっている昔のクロモリロード……OBが寄付、という名目で棄てていったものだ……をバイクハンガーに吊るした。整備はちゃんとしてあるので、今でも普通に乘れる。……今度、公道でも乗ってみよう。

そうこうしているうちに、電話が鳴った。アニキが来たらしい。ほぼこの部室の前まで車を着けられるので、あまり濡れないで乗せられる。センパイはアニキの車……中古のエブリイワゴンだ……に輪行袋に入れたTCR2を積み込んだ。自分は横目に見ながら、助手席にさっさと乗り込む。

「ごめんね、アニキ」

「まあ、今日は呼ばれるだろうと思ってたから」

アニキは地元の大学に進学したので、それなりに融通は利く。なん

だかんだで真面目だから、授業のある日は迎えに来てはくれないが、幸い今日はこの時間はもう授業も終わっているのを知っていた。まあ、ローラー漕いでたのは、このくらいの時間になるまでの暇つぶしをしていた、というのもあるのだけだ。

「すみません、和地山先輩。助かります」

センパイが部室の鍵をかけ、後部座席に乗り込むと、アニキに声をかける。

「まあついでだし。輪行袋入れさせちゃって悪いな、今度車載ラック買おうと思ってるんだけど、まだ買ってないしな」

車を出すと、返事を返す。

「いえ、置いてかなくていいだけでも、助かりますよ」

「いいロード買ったよなー、TCR2か。俺もまだそこまでのいいロードは持ってないんだぜ、まあこの車買っちゃったってのもあるけど。斉藤は相変わらずGIANT派なの？」

「別にGIANTじゃなくてもいいんですけどね、やっぱり価格と性能突き詰めると、GIANTは無難ですよ。掘り出し物が見つければよかったんですけど、残念ながら目をつけてたのはちょうど金が溜まるころに売り切れでした」

「この時期は各メーカー、みんな端境期だからねえ」

自転車メーカーというのは、まあママチャリとかはともかく、翌年のモデルを夏から秋に発表して、冬から春先くらいまでに売り切る、という感じのサイクルでモデルチェンジをしている。だから、ちょうど春先だと、昨年のモデルが安かったりする反面、売り切れになっているモデルもどんどん出てくる時期だったりするのだ。

「そういえば和地山先輩はまだドッペルなんですか？」

「アニキは変態だからな」

「変態とは酷いな。アレだってちゃんと組みなおして、手入れてやりやかなり走るんだぞ」

アニキは変態だ。……別に、性的な意味じゃないぞ。なんというか、ヘンな自転車が好きなのだ。高校のころから相変わらず乗り続けているのは、折りたたみロードだ。それも、DAHONあたりの正統派ではなく、ドッペルギャンガーの806。最初は安かったから、というのが理由で選んだのだが、なんだかんだで改造にハマってしまい、ホイールはWH-R500を135mm化して……折りたたみロードなのにエンド135mmなのかよ、とぼやきながらうきうきとハブ軸の交換をしたのを今でも思い出せる……さらにコンポーネントもSTI化、本体価格よりもよっぽどパーツの方が高い、という状況に陥っていたりする。

「そりゃ、たいていの自転車はそうだけどさ」

「とにかく、ああいうよく分からないチャリをどうにかするのが男の浪漫なんだよ」

「分かるような分からないような……っと、和地山先輩、7月のポタは顔出します？」

「ああ、一応あけてある。バイトもシフト外してもらった」

「了解です。じゃあ、久しぶりに一緒にできますね」

7月のポタリングは、新入生もなれてきた頃だからと、100km超えが予定されている。あまりアップダウンは無いコースではあるが、やはり慣れている人間が多いのは心強い。懸念されるのは気温で、今年はどうやら暑くなりそうだ。

「回収車は大丈夫？」

「ええ、先生がバンを借り出してくれてますから」

「アニキも最近長距離はあんまり走ってないだろ？」

たまにはアニキと走るのも悪くない。面と向かつては言わないが、僕もアニキが参加してくれるのは嬉しいと思う。実のところ、割とブラコンぎみなのかもしれない。変態、とか言うのは照れ隠しだ。

「じゃ、決まりだな。ひさしぶりにsqualoで飛ばせるな」

「一応、1年はまだ長距離走ってませんから、お手柔らかにお願いしますね」

「センパイこそ、新しいロードで浮かれて一人で飛ばさないくださいよ？他の皆、クロスだったり安ロードだったりなんですから」

「わかってるよ、大丈夫だ……と、思う」

頼りない返事を聞いているうちに、斉藤センパイの家に到着した。雨も少しは小降りになっていて、余裕を持って積み下ろしができた。

「和地山先輩、ありがとうございます。助かりました。じゃあ、和地山、また明日」

「おう、お疲れー」

「はい、また明日」

さて、7月ポタは僕はどれで行こうかな……？遠足の前のようなきうき感を毎月のように味わえるのは、この部活に入ってよかったと思うのだ。

閑話(1) もしくは解説らしきもの

「えーと、どうも、和地山望です」

「どうも、和地山兄です。……って、もう閑話なの？」

「作者曰く『あとがきとかでマニアックな自転車話の解説をやるのかと思ったんだけど、もう二話目にしてマニアックな話に踏み込みすぎて、いつそのことだから分離することにした』らしいよ」

「はあ……なんかそれって本末転倒じゃない？」

「まあ、本文より長いあとがきとかありえそうで怖いし、これはこれでいいんじゃないの。第一、アニキが変態だからいけないんだぞ」
「俺最初の設定では普通に折りたたみスキーだったはずんだけど、なんでドッペラーになったんだろう」

「ほら、中二病をちゃんと治しきってなかったところに、金がなかったからだよね」

「まあそうなんだけども。しかし最初から雨が降ってて（妄想の中とローラーはともかく）自転車に乗ってない自転車小説ってどうかと思うな、俺」

「僕もそう思うけどさ。まあ、ともかく解説行きましょう」

「そうだな……とりあえず、何がマニアックで何がマニアックじゃないんだろう？……殆どマニアックなことなんて書いてないよね？」

「アニキ……それは自転車マニア側に毒されすぎ。作中でもある程度は触れてるけど、最初っからわかんないことだらけだよ、多分」

「そうなのかなあ。とりあえず基礎的な事も含めて、とにかく解説してみちゃおうか」

「うん、そうしよう」

【ローラー】

「……これは常識だよな？」

「んなわけないでしょう。えーと、自転車を固定して、屋内で走ら

せる……というか、車輪を回転させるための器具、だね。『固定ローラー』と『三本ローラー』がある、というのは作中でも述べてるよね。僕が部室で乗ったりしてるやつ」

「まあ、ほら、フィットネスクラブとかにあったり、あと通販で思わず買ってしまったって物置に仕舞われるか居間のオブジェになる運命のエアロバイクなんかを、実際の自転車を使ってできるようにするための器具だと考えてもらえばいい。和地山家には『三本ローラー』があります」

「『固定ローラー』と『三本ローラー』の違いは、『固定ローラー』は、後輪の車軸を固定して、ローラーを後ろの車輪に当てて負荷をかけるのね。で、『三本ローラー』は、前後輪ともにローラーの上に乗つけて、固定せずにバランスを取りながら乗るの」

「まあ、百聞は一見にしかず。これを見て欲しい」

固定ローラー

<http://www.youtube.com/watch?v=77uqI55FPS8>

三本ローラー

<http://www.youtube.com/watch?v=smtBHmkMU8E>

「おお、三本ローラーの方あぶない。まあ僕もよくコケかけたけど、今は乗れるよ。そういうば、アニキ乗れるようになったの？」

「……いや、実はまだ……」

「あの三本ローラーアニキのでしょ！ちゃんと乗れるようにならないと、もったない」

「まあ、うるさいからあんまり使えないし」

「カッコだけで買い物するからそうなるんだよ？もう……」

【ポタリング】

「……これは作中の説明でいいよね？『自転車による散歩』。まあ、競技とかシリアスなトレーニングとかじゃなくて、わりとのんびり自転車で走ることを『ポタリング』っていうよ」

「これ、和製英語なんだよな。1950年台の自転車メーカーのカタログには『ポタリング』って言葉がもう使われてるらしいから、最低でも半世紀以上は使われてる言葉って事か」

「このことから、五方原高校自転車部の通称は『ポタ部』って呼ばれてます。自転車競技部じゃないって事だねー」

「別にやりたい人がいれば自転車競技に出場とかしてもいいんだろうけど。俺のころにはもう、誰もそうしたいって人いなかったな。ヲタ多かったしな、俺もだけど」

「まあ、文化系体育部、もしくは体育会系文化部だからね」

■登場メーカー・車種解説

【GIANT】

「GIANTは、台湾の自転車メーカーで、多分世界でも最大級の自転車メーカー。斉藤センパイの乗ってる”TCR2”のメーカーだね」

「”TCR2”はこの機種だ」

<http://www.giant.co.jp/giant11/bike|datail.php?id=00000014&action=outline>

「割と本気のロードだよな、これ。斉藤センパイ、DEFYじゃなくてなんでこっちにしたんだろ」

「おい、説明の中で説明しなきゃいけない単語増やすのやめろよ……えーと、DEFYシリーズはGIANTの別の機種、どっちかってロングライド……ああ、俺もまた増やしてる気がする。ようするに長距離を走ること……向きの機種だな。詳しくは以下を見てく

れ」

http://www.giant.co.jp/giant11/
bike|datail.php?id=00000027
&action=outline

「ほら、ウチポタ部なんだから、ロングライド向きのほうがいいと思わない？」

「まあそうなんだけど、別にTCRがロングライドに向かないってわけじゃないしな。レースからロングライドまで、万能選手だ。多分、価格の割にまあまあいい部品使われてるのを気に入ったんじゃないかな」

「ふーん。僕部品の事はまだいまいちわかんないからな。そういうのは榊君が詳しいんだよね」

「ああ、今度入った一年生か。じゃあ斉藤と気が合うかもしれないな」

「そうみたい。でも、まだTCR2のメカ触らせてくれないって嘆いてた」

「……さすがに、新品のロードのメカ、すぐに他人に触らせたいって奴はいないだろ。ちよっとGIANTの説明に戻るけど、このメーカーは結構凄いメーカーで、他のメーカーの自転車も元をたどれば実はここが生産している、とかがかなり多いんだ。まあそういう、他のメーカーの生産を請け負ってるメーカーってのはいくつもあるんだけどね。パソコンメーカーにしてみれば、ASUSやACER、GIGABYTEってところか」

「……アニキ、パソコンメーカーに例えても全然わかんない」

「……すまん」

【ドッペルギャンガー】

「……アニキが乗ってる自転車のメーカーだねー」

「どう改造したかじゃなく、どう改造を楽しんだか、それが問題だ」
「……まあ、これについては……その……以下のサイトとか見てよ。
僕はあまりコメントする気ないよ……」

<http://wikis.jp/doppel/index.php>

「とりあえず今日はこんなとこかな？アニキ、なんかある？」

「『ロードなのにエンド135m』とかその辺解説しないとわかんないだろうなあと思うんだけど、そこ解説して楽しいものだろうか、というか……リクエストがあるようなら解説することにしよう」
「多分、初心者におすすめする自転車の買い方、とかやる事になるだろうから、そこらはその辺で解説すればいいんじゃないかな。何か聞きたい事とかあったら、感想とかで教えてくださいね」

「じゃあそうしようか。今日はこの辺で」

「おつかれさまでした、また次回……そろそろ僕たち、本編で自転車乗れるのかなあ」

「さあ」

(3)

わざわざ自転車部なんてものに入らなくても、高校というところは多くの生徒が自転車に通っている。台地の上ではあるが、山の上というわけでもないこの五方原高校も、その例外ではない。だから、こういう質問をされることも多い。

「ねえ、なんで望は自転車部に入ったの？自転車なんて、別に部活にしなくても乗れるじゃない」

昼休み。昼食を食堂で食べながら、一緒に食べていたミキが聞いてきた。まあ、そう思うだろうな、と思いつつ、答えた。

「んー……僕一人で乗るなら、それでもいいと思うんだけど。皆で、それも長距離を走るって、結構無いんだよね」

「ふうん……？」

釈然としない顔をしている。まあ、そうだろうな。

「たとえば、陸上だってそうだよ。別に一人だって走れるじゃない、特に長距離とか。でも、やっぱり一人じゃ分からないこともあるでしょ？僕のアニキ、ここのOBなんだけど、やっぱりポタ部だったんだよね。だから、中学の頃から実は一緒に走らせてもらってたさ」

「へー、じゃあもう入るつもりだったの？」

「うーん、実はちょっと迷った。だって、もう仲間みたいなものだったから、多分ポタ部に入らなくても、一緒に走ってくれるって分かってたし、他にもやりたい部活はいろいろあったからね」

言葉を切って、少し考える。実際、割となんとなく入部したところもあるんだけどなあ……

「でも、ポタ部に人が入らないと、そもそもポタ部がつぶれちゃうかもしれないし……それに、お客様で走ると、ルートをどうするかとか、ちゃんとした本当の仲間として決めたりとかしながら走るのって違うだろうな、って思ったから」

「そっかー。望も結構いろいろ考えてるんだ？」

「んなことないよ、今にして思えばそういうことだろうな、ってだけ。それに、僕はそんな感じだけど、他の人がどう考えてるかなんてわかんないしね。……いや、一人だけ分かりやすい奴がいるかな」

と、その分かりやすい奴が食器を持ってうろうろしている。この食堂、生徒が入りきらないんだよね。だから、三年が最初に入って、二年、一年と時間差で利用することになってるんだけど、三年と二年は結構居座る人もいるから、一年はどうしても席にあぶれちゃう。

「榊君、ここなら空いてるよ」

「おお、さんきゅ」

「その分かりやすい奴」こと、榊雄介。機械科の一年生で、現ポタ部では多分一番のメカ好き。それも、自転車のメカが好きで好きでしょうがなくて、いろんな自転車に触れそうだからってポタ部に入ってきた（そして、実際にポタ部にあるOBたちが置いてった自転車を暇さえあれば弄って遊んでる）、まあ、メカマニア？メカフェチ？だ。

「また弄ってたの？作業服、油ついてる」

機械科の作業服は普通汚れてる（実は一番汚れてる作業服は、デザ

イン科だったりする。絵の具でカラフルになってたりするし、それがまた落ちないからだ）んだけど、さすがに一年生が今の時期……まだ、6月……に着る作業服としては、彼の作業服は明らかにダントツで汚れていた。

「だって、昼休みに入ってから一年が食堂に入れるまで、20分もあるんだぜ？ そしたら、スプロケの組み換えくらいできるじゃないか」

「……いやいや、それおかしいから。第一それで、席がなくなってたんじゃない？ 本末転倒じゃない？」

「……えっと、スプロケって何？」

しまった、ミキは一般人だった。しかも、この質問は下手すると最悪かもしれない。なにしろ、榊君はメカフェチ、メカマニア、メカオタクなのだ。

「スプロケっていうのは、本当はスプロケットって言うんだけど、チェーンを介して動力を伝達するための歯車のことで、自転車においては後輪の歯車のことを一般に言うんだ。自転車の後輪の変速は、大きさの違う歯車が8枚とか9枚とか10枚とか並んで、その歯車の大きさを切り替えることで漕いだときの重さを変えられるようになってるんだけど、その歯車の大きさの組み合わせが重要で」「ストップ！ ストップ！ ミキぽかんってしてるから！ ってかその説明、僕も無理！ とにかく、後ろのギアの歯車のことだから！」

「……なるほど、『分かりやすい奴』って榊君のことなのね……」

説明はともかく、そこだけは理解してもらえたみたい。……初対面じゃなくてよかった……

「榊君は、そういうとこ治したほうがいいと僕は思うな」

「……ごめん、つい。悪気はないんだけど……」

ミキは笑って許してくれた。

「あっはっは、まあ、とにかく好きだったちゅーのはわかったよ！確かにこういうのは分かりやすい、自転車部に入るのは良く分かるわー」

「榊君、走るのも結構好きだからね。メカのほうが好きだけど、実際に組んだ後で実走してチェックするから、自然と走るようになったみたい。まあ、ある意味自転車部あってよかったよねえ」

「ほんとだよ。いや、無くていろいろな自転車弄る手はあるけどな。勝手に駐輪場の自転車整備するとか」

「やめてよ、不審者じゃないんだから」

「まあ、中学のときはそれで怒られたんだけど」

どうやらミキのツボに入っただけらしい。腹をかかえて笑っている。

「……な、なんでそんなことしてたの？いや、してた理由は想像つくけど」

「まあ、その、楽しくて、つい……」

「……アニキも変態だけど、榊君も相当変人だよな？」

「……否定は、しない」

自覚してる変人とか性質悪いと思う。

(4)

食事を終え、購買でアイスを買って、部室へ移動する。1時間の休み時間を一年生は前半と後半で分けて取らざるを得ないので、割と忙しい。

「ってか、ミキも来るの？」

「うん、榊君が何やってるのかちょっと見てみたくなった」

「……別に、普通に自転車弄ってるだけだけどなあ」

「いやいや、普通かどうかは全く異論があるよ、僕は。僕だってチェーンのオイル注したり、ブレーキちょっと調整したり、あちこちの掃除くらいはするけど、榊君のはそんなレベルじゃないんだから。」

部室に到着すると、斉藤センパイと長崎センパイがいた。長崎センパイは二年生の女子で、デザイン科のセンパイでもある。

「こんにちはです。ちょっと友達連れてきてますが、いいですか？」

「おー、のぞみん。全然かまわないよー。まあむさいところだけど、ゆっくりしてってくれたまい」

うーん、年上なんだけど、妙に可愛いんなあ、長崎センパイは。小柄で眼鏡。乗ってる自転車も、ミニベロ。コーダーブルームのRail R 2.3 CS (2010)、ライトブルーの車体が可愛い長崎センパイによく似合う。

「お邪魔します！ 榊君がなんか凄いことやって聞いて見に来ました」

「だから別に普通に弄ってるだけだってば」

「ゆーすけ君は今なにやってるの？」

「えーと、こないだOBのセンパイが置いてったクロモリロードの10s化っすね」

「ありゃ、わりとフツーだ」

「……それを、シマニョーロで」

「……いきなり変態度がアップした」

「いやいや、だからついてけないってば！

「あはは、ほんとなんのことかわかんないなー」

ミキは言うのと、さっそく手を動かした榊君の手元を興味深そうに覗き込む。榊君は、機械に触りだしちゃうと、異常な集中力を発揮するので、その視線を気にもせず手を動かしている。ちなみにシマニョーロっていうのは、シマノというメーカーの部品と、カンパニョーロってメーカーの部品を混ぜて使うことらしい。……それって何か嬉しいのだろうか？

「まあ、ゆーすけ君のことはどうでもいいとして」

さりげなく酷いことを長崎センパイが言いつつ、ミキの方を向いて話しかける。

「……ようこそポタ部へ。女の子が入部するのは常に大歓迎だよ！自転車とか興味あるの？」

「あ、いえ、そういうことでもないですよ。望が榊君の事変態だ変人だって言うから、ほんとのとこどんな感じなのかなーって、それ見に来ただけですから」

「ふーん。じゃ、あんまり自転車に興味はないんだ？」

「ええ。正直、さっきも望に『なんで自転車部にしたの？』って聞

いちちゃったくらいですから。ごめんなさい、今は反省してるっていうか、理由はちゃんとあるんだなーって思ってます」

「まー、分かりにくい趣味かもだねー」

「僕も実際、やってみるまでこんな面白いって知らなかったもの」

これまでもくもくと自分のロードの掃除をしていた……それ、掃除するところあるの？ 最初からピカピカだったけど……斉藤センパイが、満足したのかテーブルのあたりに戻ってきて、声をかけた。

「三嶋さんだっけ、自転車通学だよね？」

斉藤センパイとは面識がある。といっても、前に帰りが一緒になっただけだが。

「はい、そうです。そんな遠いところじゃないですけど」

「放課後、その自転車もっておいでよ。榊、見てやれよ」

「ういっす」

「え、単にママチャリですよ、私の」

「あー、僕も一度見といたほうがいいと思うな。多分、買ってから整備とか何もしないでしょ？ ミキの自転車」

「うん。普通しない……よね？」

斉藤センパイは頷いて、言った。

「だから、一度見てみるといいと思うんだ。それに、そうするとそれだけで自転車の面白さ、わかってもらえるかもしれない」

まあ、ちょっと押し付け気味だけど、安全のためにもいい事かも。だからあえて反論せず、ここは一度持ってきてもらおうか。ついでに、榊君の腕も、十分理解してもらおうと。

(5)

放課後、僕が部室でぶらぶらしていると、ミキが自分の自転車を駐輪場から持ってきた。聞いた話では、中学のころから乗っているママチャリらしい。

「こんにちはー、持って来ました！」

「ほい、こんちは。んっと、どれどれ」

榊君がさっそく手にとって、チェックしだす。

「シングルでチェーンか。チェーンに油さして、あー、BB駄目かな？バラしてみないとだ。ハブのグリスアップはしとかなないとで、あー、三嶋さんこれ、後ろのブレーキ凄い音鳴るでしょ？キーっ、って」

「うん。でもちゃんと止まるよー」

「バンドブレーキは止まるのは止まるんだよな。でもまあ、音がなると後ろのブレーキ掛けたくなるだろうし……先輩、確かサーボブレーキ余ってましたよね、こないだ魔改造したときのやつ」

「おう。ついでにBBも外した奴があるぞ。殆ど新品だから使えるだろ」

「あー、了解です。じゃあそれ使うとして、後は振れ取って、あ、先輩タイヤとチューブももらっちゃっていいですよね」

「ママチャリのタイヤやチューブとか使い道ないしな。ホイールだって使っていると思うけど」

「まあこのホイールそんなに悪くないんで、このまま……」

榊君だけじゃなく、斉藤センパイも混じってあーだーこーだやりだした。見る見るうちにミキの自転車は分解されていく。

「おおー……なんだか凄いな」

「ウチの男子は、分解する自転車に飢えてるだけだよ。用事もないのに部品変えたりあーだこーだしたがるんだもの」

「でも、こういうのできるってちよつとカッコいいかも。パンクの修理だってできないもの」

「パンクの修理くらいなら、割と簡単だよー。僕もできるもの。ただ、手が汚れちゃうのが嫌だけどね」

デザイン科だから、ホルベインの水なしハンドクリーナーくらいは持ってるけど、授業中とかでもないのに持ち歩くことになるとは思わなかった。男の子は、そういうの割と気にしないけど、油ついた手で補給食とか食べたくないからなー。

「へえー。そういうのも覚えちゃうんだ。パンクって店でやると結構高いじゃない？」

「まあ、自分でやるの覚えちゃうとさすがにあの価格は出したいって思わないかな。高校生に10000円ってきついよね」

手を動かしながら、榊君が自転車屋さんを弁護する。

「まあ、15分とか時間取られるんだから、10000円くらいは取られてもしようがないんだけどね。だって人件費を時給1000円って考えても、その人働かせるためには倍くらいのコスト掛かるっていうし、その段階でパンク修理の工賃たとえば500円にしたら時給も出なくなっちゃうだろ」

「はー、そういうのもあるのかー」

「本当は、技術って安売りしちゃいけないものなんだよなー」

多分将来は技術者になるであろう、榊君は嘆く。そういつつ、自

分はタダで技術を提供しているような気がするんだが。

「これはある意味練習台にさせてもらってるんだから、いいんだよ」
「あの……じゃあ、ジュースくらい買ってくるね？」

恐縮するミキに、斉藤センパイが言う。

「あー、気を使う必要なんて全然ないんだけど。じゃあ、部品代ってことで、もらつとこうかな。俺ブリックのキリマン」

「俺ウーロンで」

「んじゃ僕は一緒にいこつと。購買まだやってたよね」

購買でついでにとお菓子の類を幾つか買って、戻る。すると、先ほどまでほぼバラバラだったものが、大分組みあがっていた。

「買って来ましたー」

「ありがとー、もう少して終わるよ。とりあえずそしたら、一度乗ってみてよ」

「相変わらずなんというか、無茶苦茶速いよね？分解とか」

「こんなもんでしょ、今回そんなにものすぐ手入れてないし。本当はちゃんと全部磨きたいけど、まあそれやってたら半日仕事だから、とりあえずは殆どグリスアップや調整だけ」

と、それだって速い。ミキは、榊君の真剣な、それでいてなんだか嬉しそうな顔をじっと見ている。……ふうん、そうなのかな？ 斉藤センパイがミキに来るように言ったのは、ちょっと押し付けがましかなくなって思わなくなかったけど、そういうことなのなら、まあ、それもアリかな。ここで僕も榊君の事を見てたりすると、なんだか泥沼になりそうだけど、そういうのじゃない。ちよつとだけ安堵した。

「ふう、完了」

「すっごい、お疲れ様。ちょっと、乗ってきても？」

「ああ、その前に……今のサドルの高さ、低いよね？」

「え？だってこれ以上高くしたら、足着かなくなっちゃう」

あー。苦笑してミキと榊君を見る。ここが多分、自転車にハマった人と、一般人との一番最初の違いなんだろうなー。とりあえず、仲介に入る。

「えーと、ほら、僕らとフツーの子一緒にしちゃ駄目でしょ」

「いやあ、なんつーかさー……どうしても一番気になるんだよね。ポジション」

それって、どういうこと？と、頭にはなマークを浮かべたミキが聞いてくる。そりゃそうだ。小学校で自転車の乗り方を教えるとき、足が着くようにサドルの高さを調整しろって絶対教わるもんない。とりあえずミキの自転車を外に出して、ミキに横に立ってもらおう。

「本当は、サドルの高さって、今のミキが乗ってる高さより、もう少し上にしたほうがいいんだ。足は多分つま先くらいしか着かなくなっちゃうけど」

と、ミキの体格からサドルを調整して、今より少し高くする。乗ってみて、と言ってミキを乗せると、足をペダルに乗せて、まっすぐ伸ばしてみてもらう。本当はもう少しサドルを上げたいんだけど、どうなるかわかってもらってからじゃないと、怖いかな。

「そうして、ペダルをつま先と土踏まずの間……親指の付け根あたり、拇指球っていうんだけど、そこで踏むの。ちゃんとした高さで、

ちゃんとしたペダルの踏み方をすれば、ぐんっ、って進むし、膝とか痛めなくて済むんだ」

いいつつ、もう一度乗ってもらい、サドルを調整しなおして。

「このくらいかな？僕も本当はちゃんとかういうの勉強したわけじゃないし、怖いだろうから、一番いいかなってポジションよりはちよっと低くしてみたよ。足、一応着くよね？」

「んー、爪先立ちっぽくなっちゃうけど、大丈夫みたい」

「多分ちゃんとやると、ほんとにつま先の先の先くらいしかつかなくなっちゃうけど、それはやめとこう。じゃあ、学校の回り、ちよっと一周、乗ってみて？」

「わかったー。じゃ、いってきまーす」

と、出て行った。実はこの学校、郊外にあるだけあって、周囲をぐるっと回るだけで1kmもある。ちょうどいいくらいのコースだ。しばらくして、ミキは興奮したような顔で戻ってきた。

「何これ！おかしいよこんなの！」

榊君が顔色を変えて、聞く。

「え、変なところあった？変な音がするとか、ギクシヤクするとか！？」

「違う！ごめん、違うよ！これ、すごーい！私の自転車じゃないくらい軽い！」

一同が胸をなでおろす。

「ふー、よかった。俺なんかミスったかと思った」

「榊君の事だから大丈夫だと思ったけど、僕もちよつとびっくりしたよ」

「びっくりしたの私だよ！だって、パンクの修理とかで修理に出したときに、一応チェックとか頼むもの！だけどこんなに軽くなったことないよ！それに、ブレーキの音は何にもしないし、よく効くし。新品のときもこんなに軽くなかったもの」

あー、それは、と榊君がウーロン茶を飲みながら、答える。

「多分これ、ホームセンターあたりで買ったでしょ？多分工場で殆ど完成したような状態で送られてきたものなんだよ。でも、安い自転車の工場での組み付けって荒っぽくてさ。本当の性能は、ちゃんと組みなおさないとわかんないんだ」

まあ、自転車屋で買っても組みなおしなんてなかなかやらないんだけど、とぼやいて、頭を掻く。

「だから、回転する場所、ボトムブラケットっていう……まあ、クランクの付け根のこと、あとハブ、つまり車輪の軸を保持してるところね。そこをちゃんと組みなおしてやった。グリスはほとんどなくなつてて、ベアリングに傷もついてたから、BBは交換しちゃった。あ、これは余りのパーツだから大丈夫。ハブはベアリングを交換して、グリスアップ。後は、後ろのブレーキは音が鳴らない大体系新品に交換、前のブレーキはシュー、えーとブレーキのゴムのことね、あとブレーキのワイヤーも交換しといた」

「……えーと、それってなんか凄いことじゃないの……」

「まあ、工賃を本気でちゃんと取るなら。ただ、部品代はほんと余りの部品で組んでるから、全然かかってないし、工賃についてはむしろ、さっきも言ったけど、俺こういうの弄るのが好きだからさ、気にしないで。ウーロン茶ありがとう、ご馳走様」

だからメカオタクは！普通そんな説明したら女の子引くって！と、思っていたのだが、どうも榊君がお気に入りらしいミキは、夢中でしゃべる榊君の姿をじっと見てるだけでなく、出来れば話を理解したいと思っただけでなく、凄くきちんと聞いていたみたいだ。だったら……ちよつと、後押ししちやおうかな？

「斉藤センパイ、せっかくだから、週末のポタ、ミキも誘っていいですか？榊君も今週は出るんでしょ？」

「うん、そのつもりだけど」

榊君は頷く。斉藤センパイは、もちろんOKだ、と承諾をした。そして、地図を取り出すと、初心者でもいけそうなルートを検討に入った。

「うーん、確かにちよつと興味はあるんだけど」

と、ミキは榊君の方を見て、僕の方に向き直る。

「でも、自転車どうするの？私、この自転車しか持ってないんだけど」

「もちろんポタ部にも何台か余分はあるし、貸せるけど……いいでしょ、これで」

と、ぼん、とミキのママチャリを叩く。ミキが驚いた様子で聞き返す。

「これで！？だって、ママチャリだよ？」

「別にママチャリだって、全然大丈夫。せっかくだからセンパイ、週末の定例ポタはママチャリ縛りにしましょうよ」

「ふむ、それはそれで面白いな。ママチャリ……逆にママチャリだと台数そろわないかもしれないから、ママチャリ十小径車縛り、つてどこでどうだ？」

「いいんじゃないですか？……ほら、これで皆ママチャリだよ、ミキ」

あ、アニキ参加できないかも。まあママチャリくらいどっかでどうにかしてくるかな。

「へー……そういうのもありなの？」

「もちろん。別に何かの競技に参加しようってわけじゃないんだから、何でもありだよ」

センパイが言うと、奥から一台の、形状だけはママチャリな自転車を引っ張り出してきた。フレームこそママチャリだけど、明らかにホイールやサドルがスポーツ用に改造されているのが分かる。タイヤも細いスリックだ。例の魔改造ママチャリである。

「俺こいつで行こう。こないだ完成したけど、まだ長距離は走ってないからな」

「じゃあ、僕はママチャリGP用のアレで行きますー」

「そーゆーわるだくみはー、あたしのいるとこでしーてーよー」

不意にひょこつと姿を現した長崎センパイが、ぷーっ、と頬を膨らませながら言う。むー、なんだかほんと年上なのに保護欲をそそるというか抱きしめたくなるというか。かわいいーなー。

「長崎センパイだー。今日委員会だったんですよ？」

「うん、さっきおわったー。つーかーれーたー」

「お疲れ様でした。ささ、ポツキーなどどうぞ」

「わーい。……えっと、ミキちゃん歓迎ポタ？入部決定かにゃー？」
ポッキーをぱくぱくと食べながら、長崎センパイがミキの方を見て言う。ミキはちよつと困ったように考えていて。

「あの、まだわかんないんですけど、どうしようかな……」

「まあ僕としては、入部するかどうかとかそういうのはおいとして、とりあえず一度一緒に走ってみたいなーって。榊君がミキの自転車整備したんで、その实力を知ってもらいたいなーってのもあります」
「うん、そゆのもいいよね。えーっと、小径車もOK？じゃ、あたしのはレールちゃんでもいいよね」

「まあ問題ないだろ」

長崎センパイの乗ってるコーダブルームのRail R 2. 3
CSは20インチのミニベロ、ママチャリではないけど小径車にはもちろん入る。

「わかりました！じゃあ、私も是非参加させてください！」

迷っていたミキも、明るくそう宣言すると、よろしくおねがいします！と頭を下げた。こうして、土曜日のポタはママチャリ（+小径車）で、と言う事になったのだった。

(6)

6月最後の土曜日。五方原高校、部室前、9時集合。そう決まって、とりあえず部員にはメールが回された。今回のテーマは、ママチャリ・小径車縛りの「ショッピンングセンターポタ」となったのだ。比較的近い場所にあるショッピンングセンターを、3件回る。

五方原高校は、この間いくつかの市町村を合併して、政令指定都市になった松浜市にある。位置的には、その、合併前の旧松浜市の北の端くらい、以前の松北市、現在の松北区との境目に近いくらいに位置している。

「で、今回はとりあえず松北までざーっと行って、サンストとプレ葉に寄る。そしたら、竜川渡ってから、南に下りて、また竜川渡って戻ってきて、イオン行って球場の裏の坂上って学校まで戻る感じで」

集まった部員に、ざっくりと斉藤センパイがもう一度コースを説明している。実はこのコースが決まる前は、いろいろ紆余曲折あった。最初は、竜川の上流にあるダムに行つて帰ってくるコースを考えてたらしいけれど、ざっくり考えたら40kmくらいになって、却下。別にそんなにキツイコースじゃないけど、今回はママチャリ縛りだし、初心者の子ががいるからなー。距離って意味では第二候補だった松浜湖や鳴佐湖も却下された。ま、松浜湖は7月のポタの目的地だからね。

「……それって何キロくらいあるの？」

「地図上では、30kmくらい。まあ、途中で休憩はたくさん取るから大丈夫じゃないかな？」

「30kmかー……1日じゃ走ったことないなあ」

「ま、大丈夫だよ。そんなに大変な道ないから。それより、そろそろ暑いし、日焼け止めと水の補給だけちゃんとしながらいこう」

今日の参加者は斉藤センパイ、長崎センパイ、榊君、ミキ、そして僕。アニキは悔しがってたけど今日は用事があるらしい。一応声はかけといたんだけど。他の部員は、今回は不参加。まあ、イレギュラーだけど

部室の前には今回乗っていくママチャリや小径車が並んでいる。センパイの手には、例の魔改造ママチャリがある。

「あー、これが例のなんですね」

「そうそう、三嶋さんのママチャリの部品のいくつかは、これから移植した格好になるね」

どんな魔改造かというと、榊君曰く

「27インチで1万円くらいのノーブランドのママチャリを適当に買ってきてそれにあまっていた700cのホイールとロード用のロングアーチのキャリパーブレーキつけてついでにあまっていた部品で外装8速化、あとBBはMTB用のカトリッジBBに、クランクもあまっていたMTB用にしてさらにペダルはSPD-SL。泥除けとカゴは外さない」

「泥除けとカゴはママチャリの命だからな」

だそうです。命ですか、センパイ。うん、やっぱりミキだけじゃなくて僕も置いてきぼりだよ。いやなんとなく分かるけど。

「ってゆーか、クロスでいいよねー？それ」

長崎センパイのツツコミに、わかってないなあ、と言わんばかりに
斉藤センパイが反論する。

「ちっちゃ、ママチャリでそれをやるのが浪漫なんだよ。あと、
あまった部品だけで組んだから殆ど金かかってないし」

「ブレーキだけは買ってきましたけどね。後は余りで出来ちゃいま
したねー」

「まあ、この部活、OBたちも要らなくなった部品時々持ち込んで
くるしなあ」

それに対し、今回僕が乗っていくママチャリは、ママチャリGPに
参加できるラインで出来るだけの事をしたタイプだ。一見しただけ
では単なるママチャリにしか見えない。

「ってかまあ、ママチャリGPのレギュレーションが『無改造の市
販車』だもんなあ」

「だから、『改造』じゃなくて『整備』って言い張れる事しかして
ないんですよ」

つまり、徹底的に前後輪のハブやBBの玉あたり調整して、出来う
るかぎり軽く回るようにした、って事だよな？

「簡単に言うよな。そのクラスのハブの調整ってもとの部品の
精度低いから、すっげー面倒なんだぞ。研磨しなおしとか、結構大
変なんだからな」

「まあ、この魔改造ママチャリより、そっちのママチャリGPスペ
シャルの方が絶対手間かかってるよな」

さて、そういう榊君が何に乗っているかっていうと、今回は折りた
たみだった。

「あ、僕それ初めてみるかも。DAHONだっけ？」

「いや、DAHONからライセンスされて、他のメーカーで作った奴……DAHON OEMってやつ。これはHEADのCAA061だね。去年安売りしてたから、買ったんだ。フレームの折りたたみの機構はDAHONのと同じだけど、フレームの材質が悪くて重かったり、あと変速機が安いのだったりする」

「へー」

「まあこれはフレームはアルミだし、まあまあだったと思う。折りたたみ部分は同じだから、あとは自分で適当に弄っちゃえばいいしね」

「そりゃ、榊君ならいいだろうけど」

「別に普通の人なら、改造しなくても、まあ必要十分だと思うよ？よく分からないホームセンターとかでよく売ってる、自動車メーカーとかの名前の着いた折りたたみ自転車より遥かにマシだから」

長崎センパイは、何時も乗っているコーダブルームのRail R 2.3 CS、2010年モデル。実はこれも結構榊君が隙を見ては弄りたいと狙っている。

「だって、これダイナパワーだよ」

「何それ」

長崎センパイもまったく意識してなかったんだけど、どうもこれにつかってるライト用のダイナモが珍しいものらしい。サンヨーのダイナパワーって言うんだけど、普通のダイナモのライト、まあよくあるママチャリについてる電池式とかハブダイナモじゃない、リムにおしつけて回すやつ、あれは前輪に取り付けるんだけど、ダイナパワーっていうのは、フレームのBBのこの下に取り付けて、後輪の中心に押し付けて回すんだそう。

「多分、クラシックな印象出したかったってのもあるんだろうけど、ダイナパワーって性能いいから、どんどん採用して欲しいんだけどなー」

「あ、でもたしかに、これ夜ライトつけてもかるいよー。それに、このライトあかるいし。へー、そうだったんだ。しらなかったー」

この自転車にはフロントバッグも標準でついてるけど、長崎センパイは「かわいくない」と言って、車体の色に合わせた水色のデイパックを持ってきて、それをハンドルから下げている。キャリアは着いているから、それでも十分みたい。

ちなみに長崎センパイ以外は荷物はどうしているかっていうと、今回ママチャリな3人は普通にカゴにバッグを入れているし、折りたたみな榊君はメッセンジャーバッグを背負っている。荷物の中には日焼け止め（特に女子は、さっき念入りに塗った）、あと水はカゴに直接入れて、時々飲む。それとタオルくらい。本当は各自パンク修理用具は持つてるべきだけど、今日は斉藤センパイと榊君が持つだけにしている。

最後に例のミキのママチャリだ。ミキの家まではここから2kmくらいしかないし、まだ整備してから2日くらいしか経ってないから、どんだけ変わったかまだ実感してないだろうと思う。

「そうでもないよ、すごーい変わった！でも本当にこれで30kmとか走れるの？」

「んー、僕は全然余裕だと思うな。まあ、普段の生活とは使う筋肉が違うから、100kmとかやるならちゃんと慣らしてからじゃないとダメだと思うし、坂道登るのはつらいかもだけど」

今日の服装は本当に普通の服だ。スカートではなくパンツルック。上はできるだけ涼しい格好にしている程度。あ、あと帽子はかぶっている。ママチャリなのでヘルメットは無しで。本当はママチャリだろうがなんだろうがヘルメットしたほうがいいと思うけど、あんまり奇異な眼で観られるのも嫌だ。

斉藤センパイがんじゃ出発するけど、と声をかける。最後の確認だ。

「えーと、一応念のため、確認します。全員水持ったよね。ぬるくなるけど、時々ちゃんと飲んで。あんまり一気に飲まないで、喉が渴く前にちょこちょこ、ってのが理想。一応大丈夫だと思うけど、塩も忘れないで。塩のタブレットが嫌な人は、塩飴もあるよ。周りの人がみて、様子が変わかな？って思ったら、本人が大丈夫って言うても走るのを止めて、俺か長崎に言っ。たかが30km、でも30kmだから」

「「はい」」

「今回は三嶋さんがいるから、特にゆっくりいきます。三嶋さんは驚くかもしれないけど、主に車道を走るからね。怖いかもしれないけど、むしろそっちのほうが安全だから。ちゃんと一列を崩さないで。手信号は、まあ、できたらして。三嶋さんもいるから、声かけもよろしく。先頭俺、最後悪いけど紳頼むわ」

「了解です」

「あとの3人は、順番はどっちでもいいけど、三嶋さん真ん中がいいと思う。長崎、和地山、よろしくね」

「まかせなさい」

「僕も」

「よろしくおねがいします」

「じゃ、本日のポタはじめます。最初の目的地は、サンストリート松北だ！出発！」

うわー、大分暑くなってきてるなー。これは30kmにしといれ正解だったかも？漕ぎながら僕はそう思った。まあ、でも来月の100kmポタはもつと暑くなってるはずだから、もうちょっとちゃんと準備しとかないとなー。

6月最終週、梅雨の真っ只中の貴重な晴れ間。ただ、湿度は高いので、気温以上に暑く感じてしまう。きっちり一列になって車道を走りながら、前を走るミキに声をかける。今は斉藤センパイ、長崎センパイ、ミキ、僕、榊君の順番で走っている。

「やっぱ暑いねー。大丈夫？」

「まあ、まだ走りだしたばかりだし。走ってる間は風があるから大丈夫かも！」

「とまるとあついけどねっ。」

長崎センパイが会話を聞きつけて、参戦する。センパイ、振り向くのはやめませんか、危ないし。

「あはは、だいじょーぶだよ、ここなら。他じゃないから」

まあ、ここはとんでもなく広かった広い道ですからね。車道を走っているといても、ママチャリだとしても速度的には白線の外側……えーと、路側帯っていうんだっけ。これを走ることになるけど、ここの路側帯は広くて道もいい。ずーっと北に、工業団地に行くまで続いている道だ。僕もよく走る。ロードで走ると本当に気持ちいい道なんだよなー。

「ロードじゃなくても、このママチャリでも十分気持ちいいよ！」

ミキが言うと、カゴに突っ込んであるペットボトルを手に取り、軽く口に含む。僕も飲んだ。中身はお茶だ。本気で走るなら中身にも気をつけたほうがいいだろうけど、今日はともかく水分が取れて、ぬるくなっただけとき極端に不味くなるものじゃなければ何でもいい。斉藤センパイや榎くんは水だ。この2人は基本的に水以外の飲み物は走行中は取らない。

「転んだ時とか洗えるし、最悪頭からかぶってもいいからね」

「まあ、水スプレーもあるけど。今日は、ちよつと湿度高すぎて、水スプレーはあまり向かないかもな。次の信号右な」

斉藤センパイがポケットから、百円ショップで買ってきたアトマイザーに水をいれたものを取り出して見せる。

「いろいろあるんだねー」

ミキがアトマイザーに感心している。こういうの、普通の人でも応用効きそうな気がするんだけどな。

信号にたどり着くと、二段階右折（自転車だから当然だけど）で右へ曲がる。この先しばらくすると、ウチの高校がある台地から、下へ降りる坂がある。今日行く予定のショッピング・センターは全部坂の下だ。

途中もう一度信号で止まった。身体が疲れているわけではないが、汗が止まらない。タオルでぬぐうが、これは休憩のたびに日焼け止めは塗りなおさないとダメだろうなあ。

坂を下る前の最後の信号で捕まったところで、斉藤センパイが声をかける。

「知ってると思うけど、坂、下りきって右しばらくするとサンストだから！サンストのどこにある、あさひの前の駐輪場にとりあえず集合な。下りはスピード出しすぎるなよ、ロードじゃないんだから。ブレーキ弱いのが忘れないでな。車間距離も広くして、気をつけて下りて。……っと、青だ」

信号が代わり、走りだす。坂を降りるのは好きだ。が、如何せんママチャリのブレーキ、弱いのは仕方ない。斉藤センパイのはロード用のブレーキ変えてるし、長崎センパイのミニベロも、榊君の折り畳みもVブレーキだから、速度を出すのにすごく気をつけないといけないのは僕とミキだけだ。

風を切る感覚。思わずスピードを出したくなって、僕は自制した。正直、ママチャリGP用に榊君が整備したこの自転車は、なまじっかなクロスバイクよりもするーつ、と滑ってくれる。やっぱこれは気持ちいいなあ。何の不安も感じずに坂を下ると、そこはもう目的地だ。サイクルベースあさひの前の駐輪場に停めて、降りる。

「よーっし、とりあえず到着。誰かここでどっか寄りたい店がある人いる？」

「あ、僕ちよつとサンダル見てくる」ここにはクロックスの専門店があるのだ。

「あー、それは私も見たいな」

男子たちは、そのままサイクルベースあさひにとりあえず入っていた。斉藤センパイ曰く「自転車屋があるのに寄らないなんて、ありえない」だそう。まあわからなくもない。あとでフードコートで落ち合うことになった。

男子が「サイクルベースあさひ」に居る頃、僕たち女子組は連れ立ってクロックスを見に来ていた。クロックスとは……いやいや、これ説明要らないよね？自転車用語じゃないし。まあ、割と前から流行って、すっかり定着した気がするサンダル。偽物も多いけど、ここにはちゃんと本家クロックスを中心においている店があるのだ。クロックスも毎年のように、もうブームも終わりだろうと言われていたが、たぶんこんな感じのはわりとずっと定着するんじゃないかなあ。

うん、斉藤センパイや榊君には悪いけど、こっち連れてこなくて正解だった。長崎センパイとミキがこんなになんというか、相性いいとは思わなかった。僕も可愛い物は好きだけど、この二人は僕より遙かに可愛い物好きだろう。

「へー、クロックスってスニーカーもあるんだ……」

と、手にとったミキが、びっくりしたように手を離す。そしてもう一度確かめるように持ち上げて、思わず叫ぶ。

「かるっ！」

そんなにか。僕も持ち上げて驚く。これはすごい。軽い。どうやら、片足200gくらいしか無いらしい。普通のスニーカーで400gくらいあるそうだから、半分だ。

「あー、僕これ欲しいかも」

まあ、ソールが硬くないから自転車には向かないけど、普段学校

とかで使うにはいいだろう。さすがに学校でクロックスのサンダルを履いてるわけにもいかないが、スニーカーなら問題ない。まあ、どっちにしろロード乗るときはSPDシューズ……足をペダルに固定できる、専用のシューズだから、自転車の事はあまり考えなくていい。

長崎センパイは、太陽の光で色が変わるというサンダルを興味深そうに眺めている。

「ほえー、おもしろいよこれー」

面白いのは分かりますが、それ子供用ですよ、センパイ。

「むー、わかってるよ！でもかわいいーよね。あ、ジビッツも色変わるのあるんだ」

結局、長崎センパイがジビッツをいくつか買っていた。僕はスニーカーを、ミキはサンダルをいくつか眺めていたが、結局買わなかった。まあ、ジビッツくらいならともかく、今日は荷物になるしね。そんなに遠くもないんだから、またくればいいよね。

「いやいや、望の家から結構距離あるよね？」

「のぞみんはもう、距離感壊れてるひとだからねー」

「いや、僕は別に距離感壊れてないと思うけど……うーん、でもやつぱ自転車乗り出すと、確かに距離感壊れるのかなあ。10kmなんてすごい近いって思っちゃうし。長崎センパイだって別に嫌じゃないでしょ」

「まあ、ちかいよね」

「うーん……こうなっちゃうのかなあ……部活入るのどうしよう」

ミキが悩む。別にでも、例えば距離感壊れても悪いこと何もないと思うけどな。第一僕らまだ高校生だから、移動手段なんて自転車くらいなんだし。

「まあ、いいつか。それはそれとして、自然になっちゃうならしょうがないんだろうし！」

「うん、しょーがないよねー」

「自然にそうなっちゃうからなあ、実際」

とりあえずだいたい見終わったところで、フードコートへ移動。：したのはいいけど、男子が来ていない。時間はちようどくらいのはずだけど。

「……こういうのって、普通女子の方が買い物長くて、男子にうざがられるよね？」

「あー、いや、居るのが自転車屋だからなあ……たぶん僕、まだあさひに居ると思う」

「たぶんねー。ケータイならしてもいいけど、ちょっとみてこよっか」

サイクルベースあさひに行くと、案の定斉藤センパイも榊君も居た。居たというか、自転車の前にしゃがみ込んで二人で話している。

「……だからこれ、単に値上げだろ？」

「そうですね。前モデルと基本的に変わってない。エンドも135mmのままですし、ってかフレーム同じっぽいですし。単にホイール変えて型式変えて値上げしただけっぽいですね」

「初心者に勧めるのにはよかったんだけどな、これ。そういえば、今年のR3は値下げらしいじゃん。そうすると、プレスポは苦戦するんじゃないのか？」

……まあ、その、予想通りというか。もしかして、これ、ショッピングセンター毎にやるの？

「……斉藤センパイ、榊君。もう集合時間ですけど！」

「うおっ、いつのまに」

後ろに来たのに気づいてなかったのか！どんだけ熱中してるんだ。しかも、聞こえてきた話とはとてもなくくだらない話じゃなかったか！？

「くだらなくはないだろ、庶民の見方のプレスポの値上げは我々に取ってもだな」

「……でも、プレスポ誰も持ってませんよね？ウチの部活」

「まあ、なんだかねで別のメーカーの買っちゃうよね、エンド1 35mだし」

榊君は相変わらず細かいところにこだわる。いや、榊君の趣味からして当然という気もするが。

自転車屋に入ると根が生えたかのように動かなくなる男子たちをなんとか引き剥がして……実は、今日行くショッピングセンターには全部それなりの自転車屋、もしくは大規模スポーツ用品店の中の自転車コーナーがあり、これから先の前途多難さにちょっとコース選定を失敗したのではないかという疑惑が生じたのだが、それはさておき、とりあえずフードコートへ移動した。まだご飯というには早い時間だが、何しろ健康な高校生が自転車に乗って移動しているのだ。お腹が減らないわけがない。さっそくおやつを食べる。このフードコートにはクレープ屋がある。生クリームは正義だ。

「うわー、どれもたべたいー」

「私も迷うなあ。とりあえずチョコ系にしようか、イチゴ系にしようか……」

「僕はあずきアイスにしよう」

「望、それは渋くない？」

あずきも正義なのだ。

「じゃあ、あたしは『豆乳アイスとイチゴクリームチーズ』にしよー」

「私は『マロンクリームチーズチョコ』にする！」

なんかふたりとも迷った末に、メニューの中で一番変なものを選んでって感じが気が。このクレープ屋さんはそんなに変なメニューなくて助かったけど、この二人と何か食へに行く時には気を付けないといけないかもしれない。

注文したものを持って席に行くと、斉藤センパイが待っていた。櫛

君は斉藤センパイの分も一緒にたこ焼きを買いに行っている。あ、戻ってきた。トレイに水の入ったコップも持っている。気がきくことに、全員分だ。

榊君が席につくと、たこ焼きのソースのある種暴力的な香りが辺りを覆う。うう、ソースってなんでこんなに美味しそうな香りを立てるんだろう。どうやら同様の感想を得たようで、長崎センパイはじつと斉藤センパイの目を物欲しそうに見ている。

「……なんだよ。俺んだぞ」

「えー、ちょーだいよー。ほら、代わりにあたしのクレープちょっとあげるからー」

それを見ていたミキが榊君の方を見る。

「……えへっ」

「……まあ、うん、言いたいことは分かる。1つ食べていいよ」

「おおー、さすが榊君、ふとっぱらー！じゃあ私のクレープも食べていいよ！」

……しまった、出遅れた。僕はどちらにも声をかけられない。いいもん、たぶんその葡萄は酸っぱいもん。

「……和地山にもあげるよ……」

もぐもぐ食べながら（結局僕のも榊君に少しあげた。……あたりまえか）、斉藤センパイが確認をしている。

「三嶋さんはどう？ここまでは普通に付いてこれたと思うけど」
「うん、ゆっくりだったし。まだこのくらいなら」

「とりあえず、次もすぐそこだから、まあ問題ないだろうけど……その次はちよつと長く走るから。水分と塩分だけは気をつけてね。あとさ、三嶋さんのサドル、もう少し上げて様子みたいんだけど」
「ああ、これいじってもらったときに言ってた事ですよね。サドルあげるとそんなに違うもんですか？」

ミキが首をかしげながら聞く。これは、実際にやってみないとわからない所だよね。

「長距離を走るときには、効いてくると思うよ。今も、いじる前より少しサドル上げてもらってるけど、そっちの方が力入るでしょ？ たぶんもう少し上げたほうが、いいかなって思うんだ」

「じゃあ、やってみます。えーと、止まるときにサドルの前に降りて足をつく、んですよね」

「うん。座ったままじゃつま先しかつかないくらいになるから、そうしてもらうのがいいと思う。まあ、道路の段差とか見つけてそこに足を置いたり、電柱とかに手をかけて止まるとかでもいいんだけどね」

でも、ちよつとカッコ悪いんだよね。面倒だからロードの時には僕もやっちゃうんだけど。本当はちゃんとビンディング外して、ペダルとシューズの固定を解いてから前に降りるのが正解だ。

「でも、ほんと軽くなりましたよ、あの自転車。これまであんまり距離乗ってなかったからアレですけど。なんていうか、ペダルを踏み込んだときに、同じ力でもぐんつ、と進むっていうか。ううん、上手く言えない。榊君はすごい」

ミキが説明しようとして、説明に困る。たしかに整備のいい自転車と整備の悪い自転車の違いを言葉にするのは難しいって僕も思う。

自転車の状態なんて千差万別だし。

「んー、そこまで言われると照れるかも。俺もほんと普通に組みなおしただけだし」

「クロスバイクとかロードとかって、もっとすごいんですよね？そんなの榊君が組みなおしたりしたら、とんでもないことになっちゃいそう！」

「お、自転車に興味出てきた？」

斉藤センパイはミキの顔をうかがいながら、聞く。

「はい。長崎先輩のとかすごい可愛いですし、クロスバイクとかロードとかよくわかんないですけど」

「……じゃあ、次のショッピングセンターで、少し一緒に見てみようか。買うとか買わないとかはおいといて」

……それは斉藤センパイが見ただけじゃないのかな？

(10)

さて、僕達は次の目的地である、プレ葉ウォーク松北を目指していた、と思っただけに到着した。まあ2kmくらいしかないのに、すぐに到着である。

「さて、ここではもしちょっとお時間をいただけるのであれば、三嶋さんが何か興味を持てるような自転車がないか、ちょっと見てみるとかどうかな、と思うんだけど」

と、斉藤センパイが言う。

「興味があります！可愛いのがあったいな」

「どうかな、ここには自転車関係のショップは2つあるけど、可愛いがあるかどうか。まあ、いくつかまたがってみるのもいいんじゃないかな？」

「あー、てーあんでーあん」

長崎センパイが元気よく手をあげて振り回しながら、声を上げた。

「ミキちゃんに自転車のせつめーするのは、ゆーすけ君にまかせてみるといいとおもう」

おっと、思わぬところから、ある意味面白い援護が出てきたかも。正直、一緒に走りながらも、実のところポタ中はなかなか話をする、というのもままならない。僕はポタ中の会話というのは、ある意味でその走る姿、走り方をお互いに見ることだと思うけど、今日のよくな短距離ポタ、それもママチャリ縛りではなかなかね。

「え、俺すか？」

「うん。斉藤せんぱいだと絶対スペックよりな説明になるし、ロード中心になりそうかなーって。ゆーすけ君なら、そこはだいじょーぶでしょ？」

と、ちらつと長崎センパイがミキの方を見て、言う。

「それに、ミキちゃんも同級生に説明してもらったほうが気楽じゃないかなー？」

「長崎センパイ、それたぶんミキはどう返事していいかわかんないと思いますよ」

僕もちらつとミキの方を見る。何時もはわりとサバサバしていて、なんでもはつきり言うような性格ではあるが、さすがにこういうケースではちよつとどいう反応をしているのかわからないようだ。本音としては榊君と話をしたい、けどさすがに斉藤センパイの事も無碍にはできない、という所だろう。じゃあ、もう一つ手を打とうかな？

「まあ、僕も榊君が説明するのは賛成ですけど。斉藤センパイにはちよつと僕の方の相談に乗ってもらいたいかなーって思ってますし」「ん？何かあるのか？」

「僕のロードのペダルは今SPDですけど、SPD—SLってどうなのかなーって思ってるんですよ。確かこの1Fのショップならシューズのカスタムフィットとかもやってましたよね？まあ、まだ予算の都合もあるし、すぐ変えるかどうかかわからないですけど。確かセンパイ、ここの店員さんとはポタ仲間でしたよね」

「ああ、なるほど。じゃあ、俺が行ったほうがいいか」

「はい、お願いします。話を聞くだけになっちゃいそうなので、一人で行くのはちよつと気後れしちゃうんですよ」

まあ、後付の理由だ。SPD—SLにちょっと興味があるのは事実だから、バッチリ話は聞いてこよう。SPDとかSPD—SLって何かってのはあとで説明することになるだろうけど、ペダルと靴を固定する方式の違いだね。

「じゃ、榊、三嶋さんの方はお願いしていいかな？」

「了解です。んじゃ、三嶋さん、2階行こうか」

「うん、よろしく、榊君」

それでは、と自分と斉藤センパイ、それに長崎センパイもどうやら1Fのショップに来るらしい。

「あたしは後で上にもいくけどねー。少しは二人きりにしといてあげたいじゃない？」

「なにそれ、どういうこと？」

斉藤センパイが首を傾げる。まあ、どうせ朴念仁なのだ。

「気にしないでいいですよ。それはともかく、ビンディングの話なんですけど」

「ああ、えーと、どんな事を聞きたいんだ？」

「僕は今SPD使ってるのは知ってますよね。斉藤センパイはSPD—SL使ってたと思うんですが、アレって比べてどんな感じですか？」

「そうだな、SPD—SLとSPDだと、SLの方が一般的にはロード用とされているわけだ。SPDをロードに使ってる連中も多いけどな、和地山もそうだろう？…で、何が違うかってと、俺の感覚ではペダルと足との一体感だな」

ここで出ている”SPD”とか、”SPD—SL”。これはシマノの商標で、シマノ・ペダリング・ダイナミクスの略らしい。大阪に本社があるシマノ、という会社はどちらかというと普通の人には釣具メーカーとしてより有名なような気がするが、その企業の起りには自転車部品から始まっていて、実は現在世界最大の自転車部品メーカー、だそうだ。これは兄貴や斉藤センパイの受け売りなんだけど。確かに、僕たちが手にするような価格帯の自転車を見ると、どこかしらにシマノの部品が使われている。低価格帯から超高級品まで、まんべんなくグレードに合わせて部品を供給している、というのも結構すごいことのように思う。

「へえ、つまりSLの方がSPDより、一体感がある？」

「うん。なんていうのかな、SPDは点で固定されているという感じだけど、SLは面で固定されてる、って感じる。その分、長時間乗った時とか、あと本気で踏んだ時とかには疲れにくいような気がする」

実際に店頭にあるペダルと、クリート……ビンディング部分に固定される、靴底に着ける金具……を比べると、SPD—SLの方がかなり大きい。踏み面から考えても、やはりこれは面積が違うというのは間違いなさそうだ。

「なるほど。欠点は……歩きにくい事ですかね」

「まあ、SPDの場合は一応普通に歩ける靴が多いからな。SPD—SL用のシューズの場合、どうしても靴のクリートの部分が出っ張るし、底がゴムですらない靴が多いから、自転車から降りて歩こうとすると滑るとか、床傷つけそうになるとか……基本的に、今ウチの部でやってるようなポタには向かないよな」

「クリートにカバーとか付けても、やっぱりダメですか？」

「そうだな、クリートのカバーはいくつか出ているけれど、御世辞

にもすぐ歩きやすくなる、とは言えないな。無いよりはずいぶんマシになるけどね。あとは、まあ、やっぱSPD—SLのシューズの方が高いかな……」

あー。価格は重要だよな。全てを自転車に捧げるような事はしないから、普通に安いのはありがたい。フィッティングシステムを確認したけど、やっぱ諦めた。社会人なら手が出ない価格ではないと思うんだけど。

「なるほど、大分参考になりました」

とはいえ、やっぱりちよつとSPD—SLにはしてみたくなかった。ちよつとお金貯めてみようかな。

今の自分はどちらかというとロングライド嗜好、長距離を走ることが好きなタイプだと思う。だとすれば、それについて余分な労力を少しでも軽減できるなら、それには価値はありそうだ。試して、どうしてもダメなら新品に近いうちなら誰かに譲ればいいだろうし。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4877u/>

ぼたぶっ！ ～徒然銀輪話

2011年10月7日05時01分発行